

## 昭和初期の向日町と文化人

向日市文化資料館館長 玉城 玲子

### はじめに

今回の発表については、先日まで当資料館で開催していた特別展「向日神社」、平成30年(2018)が御鎮座千三百年の年とされているのを期に向日神社の歴史と文化財を紹介する特別展を行ったが、その内容を話すようにとのご依頼であった。しかしせっかく向日庵の公開研究発表会という場を頂戴したので、より向日庵に関連するテーマでと思い、4年前の秋に当館で開催した「昭和の向日町と文人」展、昭和戦前期に当時の向日町で文化的に活動・交流した人々に焦点を当てた資料展示を行い壽岳文章一家についても初めて取り上げさせていただいた展示だが、その内容をあらためてご紹介することにしたい。そのなかで向日神社や向日町・向日市の歴史についても触れたいと思う。

向日庵の「向日」については、壽岳文章・しづ夫妻協業で世に送り出された私家版を向日庵本と名付けられたのは、ひまわりを歌ったブレイクの詩とゴッホの絵にちなむ、ということは夫妻とその著作をよく知る方々の間では有名な話であろう。私家版は昭和7年(1932)にはじめて刊行されているようなので、一家が東山南禅寺境外僊壺庵から郊外向日町の西向日住宅地に転宅する前年ということになる。不勉強で単純な私は、以前には向日町にあるから“向日庵”であり、そこで作り出されたから“向日庵本”と疑問もなく理解していたが、転宅以前であればその由来はやはりブレイクとゴッホに譲らねばならない。

しかし地元に係わる者としては、やはり西向日住宅地や向日町にも関係して欲しい、と勝手な願望を抱いている。すぐ翌年には転宅されているのだから、引っ越し予定の土地の名前も視野に入っておられたのだろう、と想像したいところである(注1)。

### 1 向日神社と向日町・向日市

「向日」という町や市の名前については、養老2年(718)鎮座の由緒を持ち、今年が「御鎮座千三百年」になるという向日神社がその由来である。養老2年鎮座というのは、現在国の重要文化財に指定されている本殿を慶長2年(1597)に修理した時の棟札に、向日丘陵先端の現所在地に影向(ようごう、神が姿を現すこと)したのが養老2年と記されているのが最も古い歴史的根拠である。

神社の名前であった「向日」が地名化するのには、豊臣秀吉の時代である。天下統一を果たした秀吉は朝鮮半島・大陸への出兵を企図するが、前線基地となる九州北部への人と物資の輸送のために、京都から延びる西国街道を拡幅・整備した。向日神社の鳥居前には、平安京への遷都以降、西国街道が通っていたが、京都を出発してひと休みするのにちょうど良い地点であり、鳥居前の西国街道に沿って町場を作ることになった。街道整備の一環として、往来の人々

に休憩場所などさまざまな便宜を提供する店屋が並んでいることが求められたのである。

天正20年(1592)8月に秀吉政権下の京都所司代である前田玄以は、「向日前新町」つまり向日神社の前の西国街道沿いに新しい町場を早急に造ることを定めている。この町場はまもなく「向日町」と呼ばれるようになり、「向日」が土地を示す名前になる契機となった。向日町はその後、江戸時代を通じて京都西郊の乙訓地域における商業・文化の中心地として賑わうことになる。

やがて明治維新となり新しい時代が到来すると、明治4年(1871)1月に社寺領を官地に没収する上知令が新政府から出される。それまで西国街道より西側の丘陵地はすべて向日神社の境内であったが、参道と社殿の建っている場所と周囲のわずかな土地を残して、旧領の約4分の3にあたる広範囲が上知となった。そして明治5年11月には、上知された土地の一部に勝山校(のちに向陽校)という小学校が建設される。この後、向日神社の旧境内地には郵便局や警察署・裁判所・登記所、そして町役場や郡役所など、さまざまな公的機関が続々と建設されていき、向日町が近代乙訓郡の“郡都”となっていく。

明治22年(1889)4月の町村制施行により、向日町は周辺5ヵ村(物集女・寺戸・森本・鶏冠井・上植野)と合併する。合併してできた向日町は、漢字表記は従来と同じだが、それまでの向日町が町場である「むこうまち」であったところ、町村制下の行政区分としては「むこうちょう」と発音されるべきであった。しかし慣習的に、合併しても「むこうまち」と呼ばれることが圧倒的に多かった。この新しくできた向日町が、昭和47年(1972)10月の市制施行により、町から市となったのが現在の向日市である。明治22年4月以来の自治体の範囲がそのまま今日まで続いている、全国でもまれな事例である。

## 2 西向日町住宅地の誕生

壽岳一家が移住してくる新しい住宅地ができたのは、昭和3年(1928)11月の昭和天皇の即位式、いわゆる御大典を記念した新京阪線の開通がきっかけであった。大阪から京都まで淀川左岸の旧市街地を経由する鉄道を運行していた京阪電鉄は、新たに淀川右岸を直線的に走る新路線を計画し、別会社を興して新京阪線を敷設する。新京阪沿線にあたる向日町では、もともと町内に一つの駅を造る予定だったところ、設置場所をめぐり町内各地区間の調整がつかず、二駅造ることになるかわりに、一方の駅周辺を電鉄会社が直営で開発する住宅地の用地とすることになった。これが東・西向日町駅と西向日町住宅地の成り立ちである。新京阪線は戦後に阪急京都線となり、昭和47年10月の市制施行にともない、駅名と住宅地名から「町」の字が消えて、現在に至る。

西向日町駅の周辺は、住宅地ができる以前、向日丘陵縁辺に形成された段丘上の竹藪地であった。向日市上植野地区に残された古い絵図や古文書によれば、江戸時代には聖護院領の竹藪であったことがわかる。昭和3年当時の向日町は、向日神社前の町場部分を除けば、都市近郊の純農村地帯とっていい地域である。西向日町住宅地は、明治時代末から大正時代にかけて各地で造られつつあった、田園都市構想に基づく鉄道沿線の郊外型住宅地をモデルに開発さ

れた。昭和3年の新京阪線開通の後に造成工事が始まり、昭和6年には戸数34戸からなる西向日町住宅地組合が結成されるほど入居が進んでいる。

昭和11年(1936)の向日町付近の地形図を見ると、西国街道と明治初年に開通した鉄道・東海道線との間の竹藪のなかに新京阪西向日町駅ができ、東南に向かって段々に傾斜する駅周辺には街路が直交する長方形の区画が出現している。現在、噴水公園になっているロータリーの円形区画も看取できる。この年なら、昭和8年6月に転居された壽岳邸はすでに存在していたはずだが、タイムラグがあるのか地図上ではまだ空地のままである。

住宅地が立地するのは、乙訓地域に北西から東南方向に延びる向日丘陵の縁辺にエプロン状にひろがる段丘上であり、東南方向に傾斜して下がっていく地形であった。そこにひな壇のように造成された住宅地は日当たりの良い場所となり、東海道線の線路を挟んで東部には一面の水田を望む、まさに明るく健康的な郊外の住宅地であったことが想像される(注2)。

### 3 昭和初期向日町の文化人たち

西向日町住宅地ができた昭和初期頃を中心に向日町で活動した文化人・学者について、4年前の向日市文化資料館特別展『昭和の向日町と文人』パンフレットを参照しながら、来住年次の古い順に、残された時間で簡単に触れる。

#### (1) 河合卯之助と向日窯

京都東山の五条坂で陶芸を家業とする家に生まれた河合卯之助は、昭和3年(1928)11月の新京阪線東向日町駅開業と時を同じくして当時の向日町寺戸西野辺に移り住み、「向日窯」と呼ぶ窯を開いた。寺戸付近ではもともと焼き物に適した良質の土が採取でき、特に河合が来住の前年に朝鮮へ旅して感銘を受けた鶏籠山窯の土と似ていることから、この地に居を構えることにしたという。開通したばかりの鉄道路線が、このような京都からの移住を促進したことはもちろんであろう。

ここで植物の葉を貼り付けて焼成する押葉模様という独特の技法を確立し特許を取り、向日町周辺の自然の中に題材を求め、植物をモチーフとした陶器を数多く制作した。陶器の制作をつうじて、同じ陶芸の富本憲吉や作家の吉川英治など多彩な人々と交流を結び、向日町寺戸の河合邸は、関西文化人のサロンのような雰囲気有していたといわれる。大正末から昭和戦前期にかけて調査・執筆されながら未刊に終わった『乙訓郡誌』編纂事業において編纂主事を務めた井川定慶なども、河合のもとに出入りして親交を結んでいた。

#### (2) 壽岳一家と向日庵(向日居)

壽岳一家について、ここであらためて紹介することはしないが、些細なことではあるが気になっている一、二の点について述べる。

まず「向日庵」については、壽岳一家が住まいする建物の号で、そこで作った私家版が「向日庵本」となるが、住居については別に「向日居」とも記した。壽岳邸内の二階への階段の踊

り場には「向日居清規」とある書が掲げられている。壽岳文章は執筆した短文の末尾に「向日居にて」と付ける場合がみられる。

次に西向日町住宅地への移住の年であるが、はじめに、でも述べたように昭和8年(1933)であることは壽岳家の人々による様々な著作に明らかであるが、建築の研究者が建物について記す学術報告には昭和9年の建築であるとされる(注3)。これについては建築学ご専門の先生に直接お尋ねしたところ、施工した熊倉工務店に保管されている図面に昭和9年とあるため、建築学的にはその年代がとられているとのことであった。

最後に向日庵本の象徴となっている茶の葉の文様についてであるが、向日町周辺の農家の庭先によく見られることもあって用いられたものであることが、一家の著された文に散見される(注4)。向日町といえば竹の多いことで知られ、竹藪のある風景も一家の著述によく描写されている。現在市内に残るのは食用タケノコを採るための孟宗竹の竹林がほとんどであるが、高度成長期以降に市街化が進むまでは段丘上に真竹や淡竹の竹藪が多く、古来竹材の産地としても名高い土地柄であった。お茶については、幕末から明治時代にかけて開港にともなう海外貿易の主力品としてお茶の需要が拡大した時に、乙訓郡でも輸出用の茶栽培に積極的に取り組んだ時期があった。やがて明治20年代(19世紀末)以降になると、南山城で生産される宇治茶ブランドに押されて乙訓での茶栽培は行われなくなり、これによってかわるようになり日当たりの良い丘陵地を利用した孟宗竹のタケノコ栽培が始まり、現代まで続く産地となる。

お茶の木は農家の自家用として庭先や竹藪のなかに残されるのみとなり、昭和戦前期に壽岳一家が目にしたお茶の木と実は、こうした時期の風景であった。

### (3) 笹部新太郎と向日町桜苗圃

笹部新太郎は、大阪堂島の大地主の家に生まれ、生涯を在野での桜研究に捧げ「桜博士」と呼ばれた人である。実家からの資産分与によって宝塚の武田尾に広大な桜の演習林を造り、そこを拠点に日本古来の桜を研究、大阪造幣局の桜をはじめ各地の桜の名所へ苗を提供するなど、桜の管理・育成に力を尽くした。

昭和10年(1935)、笹部は向日丘陵の向日神社裏山から寺戸にかけての土地三千坪ほどを購入し「桜苗圃(おうびょうぼ)」を造る。笹部をモデルにした水上勉の小説『櫻守』(1969年発行)には、向日町の桜苗圃も主要舞台の一つとして登場する。笹部と向日町の縁を取り持ったのは河合卯之助であり、共通の知人を通して親交があったようである。笹部の自伝である『櫻男行状』(1958年)には、東向日町駅から桜苗圃に向かう途中にある河合邸でその行き帰りに立ち寄る様子が著されている。阪神間に住居や研究拠点のあった笹部と向日町との縁は、新京阪線という新しい交通手段で結ばれ、先に来ていた人物との交流がさらに別の人を呼び寄せることになった。

笹部の向日町桜苗圃は、昭和36年(1961)に名神高速道路建設のための土砂の採取地となって消滅してしまい、跡地が府営向日台団地になっている。近年、かつてあった桜の園を偲ん

で、地域住民の手によって団地周辺の道路沿いに、笹部が愛した日本古来の桜の品種が植樹され整備されている。

#### (4) 狩野直喜と葵園

京都帝国大学の教授で中国文学の学者であった狩野直喜は、大学近くの左京区田中に自宅があったが、昭和12年(1937)に西向日町住宅地の一角にあたる現在の向日市上植野町野上山の地に茅葺きの別荘を建てた。向日町の地名にちなんで向日葵からとったものか「葵園(きえん)」と名付けられた。狩野博士の滞在中は、各所から知識人が多く集まって文学談義に花が咲いたという。

当時の乙訓郡教育会地歴研究部の主要メンバーであった向陽尋常小学校訓導の御子孫のお宅に、狩野博士の手になる七言絶句・二行書きの漢詩軸が伝わっていて、地元の教育者などとも交流があったことをうかがわせる。葵園の建物は同じ場所に健在であり、中国文学者の書齋にふさわしい格調の高さをただよわせている。

#### (5) 渡邊武と西向日住宅地“花屋敷”、椿コレクション

薬学博士の渡邊武は、東京帝国大学医学部で薬学を修めた後、武田薬品工業研究所に勤務し、その在職中には正倉院の薬物・香薬調査に参加し、また日本における漢方薬研究の第一人者として業績を残した。また薬学研究のなかから特に椿を探究し、植物としての椿はもちろん、あらゆる分野の椿に関する美術工芸品や資料を収集した。

渡邊は、河合卯之助の子息紀(ただし)と京都府立第二中学で同級生だった関係で河合家と親交があり、葵園のやや南方、周辺の人々から“花屋敷”と通称される場所に住んだ。のち昭和40年代に寺戸町西野の地に安井杵工務店施工の家を新築して移る。平成6年(1994)には、収集した椿に関する書画・陶磁器類ほか資料を向日市へ寄贈する。この渡邊武コレクションは向日市立図書館で保管され随時展示されている。

渡邊は、河合とのつながりもあり、「天平の会」を主宰していた東大寺観音院の上司海雲はじめ、入江泰吉や土門拳、吉川英治や杉本健吉など、当時一流の文化人らと親しく交わった。図書館にあるコレクションのなかには、薬や椿を通じた各界著名人との交友を示す作品や書簡も含まれている。

#### おわりに

ご紹介してきたように、乙訓郡向日町は西国街道沿いの町場として古くから商業・文化の地域的中心であり、近代に入ってさらに教育や行政の中心となっていった。身近に豊かな自然があり田畑や竹林に囲まれた日当たりの良い土地には、すでに明治初めに東海道線が通じたが、昭和初期には私鉄も併行して敷設され、交通至便な都市近郊地として人や物の新しい流れがおこった。地元との交流によって魅力ある文化が生まれ出され、これまでの伝統の上に新たな歴史が積みかさねられた。

現在もめまぐるしい都市化・開発・再開発の渦中にある当地では景観は日々変貌をとげており、ここで取り上げた人や家居もすでに失われたものが多いが、壽岳邸はじめ今日なお残されているものには、未来へ継承すべき歴史であることの使命が宿っているのかもしれない。

(注1) この発表後に著作をあらためて調べたところ、『歳月を美しく』(初版昭和22年(1947)3月、後に『壽岳文章・しづ著作集』1所収・昭和45年(1970)4月発行)によれば、昭和7年秋頃に文章氏知人の勧めがあり家族で西向日町住宅地を下見に行き、気に入って土地を買求め、翌昭和8年2月初めには早くも棟上げをしている。そして6月には新居に移っている(「年譜」『壽岳文章・しづ著作集』2・昭和45年(1970)9月発行)。昭和7年に世に出された私家版向日庵本とは微妙な前後関係であるが、明るい地勢の新居での生活を念頭に、ブレイクの向日葵を歌った詩やゴッホの絵が連想されたのではないかと思われる。

(注2) 前注の文献などによれば、昭和6年に夫妻及び潤氏は腸チフスに罹患している。転居の理由として、増える一方の蔵書の整理や大阪の義父と同居できることともに、明るく健康的な立地の住宅を求めたことが挙げられている。

(注3) たとえば『京都府の近代和風建築』(京都府教育委員会、2009年発行)など。

(注4) 中島俊郎「壽岳文章・しづ夫妻が問いかけたもの」(『向日庵』講演録、2018年所収)に引用された壽岳章子「家の花」のなかの一節など。

〈本文・注にあげた以外の参考資料〉

「最新情報コーナー展示(パネル)狩野博士と葵園と向日町」(向日市文化資料館、1998年発行)

「むこうし桜ものがたり」1~4『さくらなみき』No.40~43(西向日自治会、2008~09年発行)

『図録 20世紀のむこうまち』(向日市文化資料館、2002年発行)

